| 図説 |

渥美半島
太平洋岸の海岸線を追う
―表浜海岸の侵食を見直すことから―

Contents
もくじ

1. 渥美半島の太平洋岸に広がる「表浜」 …… 02
2. 表浜東部の砂浜海岸と西部の岩礁海岸 …… 03
3. 表浜海岸は本当に1年間に1mも後退していたのか …… 04
4. 写真で見比べる南神戸と高松一色の海岸線の変化 …… 06
5. 今一度、表浜の海岸侵食を見直す …… 08
6. 古文書に記された伊勢街道の変遷 …… 09
7. 表浜集落と伊勢街道を襲った宝永地震の大津波 …… 10
8. 宝永地震の前に山屋敷に移転していた伊古部・高塚集落 …… 12
9. 江戸時代の古文書に記された伊古部海岸の大崩落 …… 14
10. 明治以降の高塚・伊古部海岸の変化 …… 16
11. 伊古部海岸の潜堤（離岸堤）の設置と砂浜の変化 …… 18
12. 林織江の旅日記から伊勢街道を読み解く …… 20
13. 江戸時代の2枚の奥郡村絵図に描かれた表浜の街道 …… 21
14. 畔田城の崖下に城下村が本当に存在していたのか …… 22
15. 明治23年（1890）の地形図から表浜街道と集落を追う …… 24
16. 東神戸の分水嶺を通る表浜街道と集落移転 …… 25
17. 昭和東南海地震で崩落した表浜の海食崖 …… 26
18. 赤羽根海岸の崩落と西集落に集中した家屋の倒壊 …… 28
19. 震度6の地震のたびに崩落していた表浜の海食崖 …… 30
20. 海食崖の崩落と津波の襲来を想定した避難計画の必要性 …… 31
21. 海食崖の崩落を避けて移動したと言われた赤羽根の民家は …… 32
22. 赤羽根海岸の波浪による侵食と民家の移転 …… 34
23. 赤羽根漁港建設に伴う砂浜の変化 …… 36
24. 渡辺崋山が旅日記に記した池尻川の渡し …… 38
25. 赤羽根漁港の西側に設置された離岸堤 …… 39
26. 堀切と西ノ浜の海岸線の変化からみた砂浜の消失 …… 40
27. 日出の石門から伊良湖岬へ …… 42

本書は、海岸侵食の見直しから始まって、次の6つのテーマが相互に関わり合いながら出てきます。

■：太平洋岸の地形　■：海食崖の後退　■：消えた伊勢街道
■：地震による海食崖の崩落　■：砂浜の変化　■：集落の移転

そこで、表浜で起こってきたさまざまな事象について、半島基部の白須賀から半島先端の伊良湖岬までを東から西へ伊勢街道を旅するような流れに構成しました。

各見出しをテーマごとに6色に色分けしてありますので、関心のあるテーマを選んで拾い読みをしていただくことも可能です。

本書では、古文書や絵図に記録が残されている江戸時代以降について検証していくことにしました。また、本書で扱っている「伊勢街道（熊野街道）」は、江戸時代以前から表浜海岸の砂浜を通っていた東国から伊勢・熊野方面へ向かう道であり、「表浜街道」は、高台に移転した表浜集落を東西に結ぶ道（明治23年の地形図に示された白須賀～伊良湖を結んでいた旧道）、「国道42号」は、県道から昇格した表浜を通る現在の国道というように区別しながら読み進めていただきたいと思います。

はじめに

昭和40年当時の東神戸海岸の海食崖（田原市役所提供）

右の写真は、1965年の台風直後の田原町東神戸海岸の海食崖の様子です。地層がむき出しになっている60mもの高さの崖が垂直の壁のようにそびえ、崖下には崩れ落ちた土砂も見えます。

ピラミッドのようにそそり立つ海食崖が、太平洋の荒波に対峙するかのように東西に連なる表浜の景観は、1954年に南神戸で生まれ育った筆者にとって、幼い日の原風景であり、大学で地形学を学ぶきっかけともなりました。

明治20年生まれの祖父から「崖の上には昔の屋敷跡がいくつもあり、崖下の海底には昔の井戸の跡もある」と聞かされ、このまま海岸侵食が進めば、どうなっていくのだろうかとも心配もしました。

昭和30年（1955）代の初めまで、表浜の砂浜では地引き網漁業が行われ、崖の上には半農半漁の村々が並んでいました。三河湾や浜松方面からの機械船が表浜沖に進出し始めると、漁獲量が激減していきました。昭和30年代後半までに表浜の村々は不安定な漁業に見切りを付け、温室園芸や露地野菜栽培へと転換を図っていきました。そして、1968年の豊川用水全面通水を契機に、渥美半島は日本屈指の先進農業地域へと発展していきました。

表浜海岸の護岸工事が1959年から始まり、消波ブロックも設置されました。その後も侵食防止工事が表浜全域で行われてきました。

一方、「砂浜が狭くなった。真夏の砂浜は焼けていて、波打ち際まで走って行くのにも苦労するほど広かった」とよく言われます。表浜を歩くと、砂浜が流失して消波ブロックや護岸壁に直接波が打ち寄せているような箇所も見られます。台風の高潮から海食崖を守ってきた広い砂浜が失われているのです。

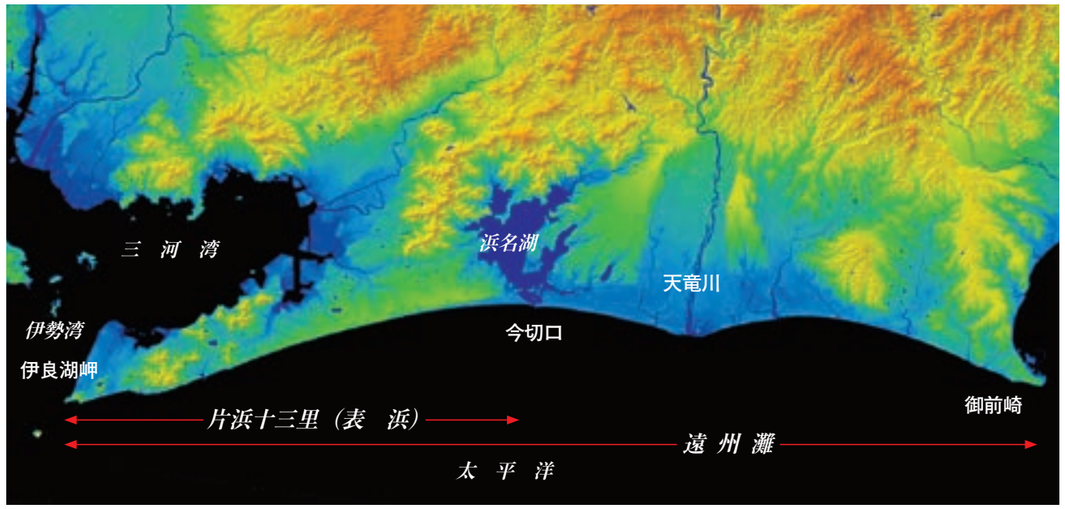
2019年に刊行した『図説・渥美半島－地形・地質とくらし』の中の「太平洋岸の海岸侵食を再検討」で、従来言われてきたような海食崖の大きな後退は確認できなかったと指摘しました。続編に当たる本書『図解・渥美半島太平洋岸の海岸線を追う』では、江戸時代の古文書や絵図を入手して、明治23年（1890）の地形図や最新の都市計画図と対比したり、過去の写真や空中写真を現地で確認したりするなど、多角的に表浜海岸の変遷について検証を重ねました。難しい専門用語もあろうかと思いますが、写真や図版と見比べながら最後までお読みいただければ幸いです。

令和3年12月

藤城 信幸

01 渥美半島の太平洋岸に広がる「表浜」

伊良湖水道上空から見た渥美半島（田原市役所提供）　渥美半島の東西の長さは約50km、南北の幅は5～8kmであり、東の浜名湖西岸から先端の伊良湖岬に向かって東西に細長くのびる。北は三河湾、南は太平洋、西は伊勢湾と三方を海で囲まれている。半島中央部から西方に蔵王山（標高250m）や半島最高峰の大山（328m）などの山地塊がある。

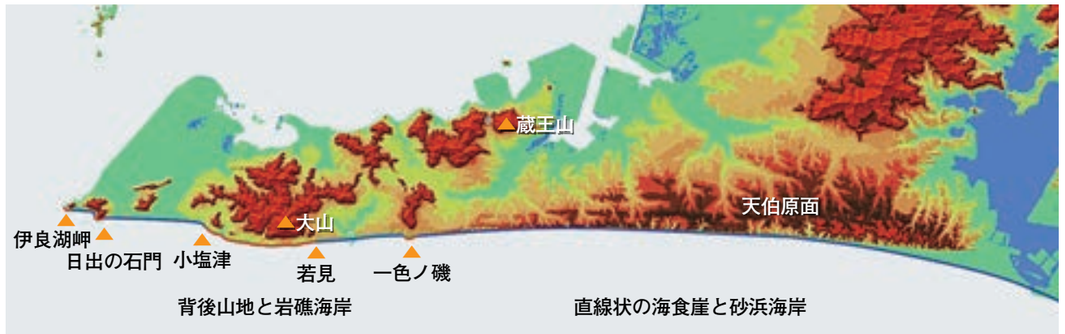


渥美半島の概要図（『地理院地図』から作成）　天竜川河口を中心に東の御前崎と西の伊良湖岬まで両方向に緩やかなカーブを描くように海岸線がのびる。この御前崎～伊良湖岬までの約110kmの海域は「遠州灘」と呼ばれる。遠州灘は江戸時代には大坂（阪）と江戸を結ぶ重要な航路であった。しかし、常に波が荒く、冬には強い北西風が吹く遠州灘は、砂浜海岸が続いていて避難港がなかったため、海の難所として当時の船乗りに恐れられていた。

また、伊良湖岬東側の日出の石門～浜名湖の今切口まで、約52km（十三里）にわたって続く砂浜海岸は「片浜十三里」ともいわれていた。地元では「表浜」と呼ぶことも多く、三河湾側の「裏浜」と対比される。

次ページの上図のように、渥美半島の東側には台地（天伯原面）が広がる。台地は南の太平洋側が高く、北の三河湾に向かって低下する。太平洋岸には海食崖が連なる。半島東部では標高70mもの海食崖が発達し、西に向かって次第に低下する。これまで表浜の海岸線は、波浪による侵食などで100年間に約100mも後退したと紹介されてきたが、この侵食については本書で改めて検討していきたい。

02 表浜東部の砂浜海岸と西部の岩礁海岸

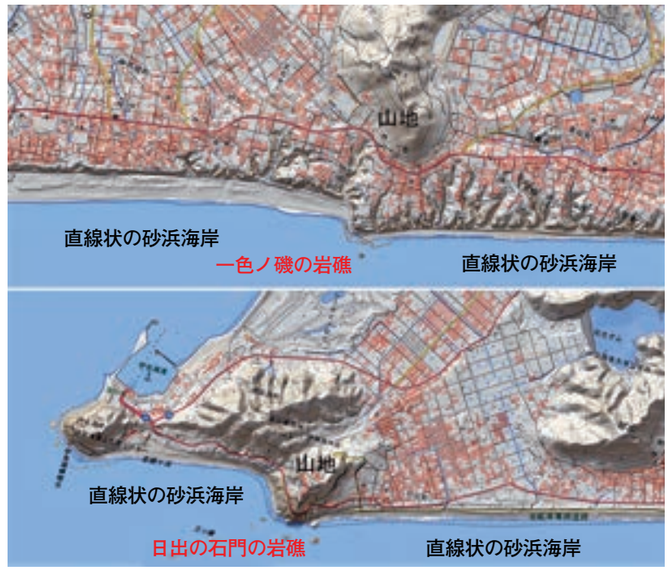


西部の背後山地と岩礁海岸、東部の海食崖と砂浜海岸（『地理院地図』から作成）

渥美半島東部の表浜は、砂浜と海食崖が浜名湖西岸～伊良湖岬までほぼ一直線にのびている。岩礁が見られるのは半島西部の約20kmの間で、高松一色、若見～小塩津、日出、伊良湖岬の4か所である。いずれも背後の山地の基盤岩が波浪による侵食を受けて岬状に露出したものである。

高松一色や日出の岩礁と砂浜海岸の関係（『地理院地図』）

右上の一色ノ磯と右下の日出の石門は、渥美半島の代表的な岩礁海岸である。背後山地の山脚部が波浪により侵食されて基盤岩が露出し岩礁をつくっている。岩礁は主にチャートという非常に固い岩石からなる。長年の波浪による侵食にも耐え、小さな岬状に海側に突出している。岩礁がなくなる西側の砂浜海岸では侵食が始まる。海食崖と砂浜海岸は、上図で示した4つの岩礁海岸の間をほぼ一直線状に結んでいる。



高松一色海岸から東を望む　高松一色～浜名湖今切まで緩いカーブを描くように砂浜と海食崖が続く。砂浜は波浪や干満の影響を受け、日々変化している。

台風直後の高松一色海岸（2018.10.1撮影）
台風時の高潮で一夜にして砂浜が流失した。